

第六回 (10月17日) 『オセロー』のメタ・ドラマ復習と解説

第一部：神父様のご講義

第六回は、神父様が卒寿を迎えられて初めての記念すべき講座でございました。取り上げられた『オセロー』は、ジェームズ一世の時代のシェイクスピアの最初のドラマで、謎に満ちた問題劇『ハムレット』の霧が晴れた作品であると説明されました。この二つの悲劇の間に、エリザベス一世が亡くなり、ジェームズ一世の時代になるという大きな変化が起こっています。

『オセロー』の問題はイアーゴーです。オセローの旗手であるイアーゴーが悪魔に一番近い問題の人物として登場します。劇は、1551年、トルコ人がキプロスに入りレパントに向かった歴史を反映し、第一幕、第三幕、第五幕に、それぞれ山場が置かれています。

第一幕は、ロダリーゴーとイアーゴーの会話から始まります。オセローの旗手イアーゴーは自己中心的な人物で、上司のオセローを嫌い、オセローに従う風を装いながら自己目的を追求します。旧約聖書の神の言葉をもじり、神を冒瀆するかのようになり、“I am not what I am.”と自らを形容する人物です。イアーゴーは、“Honest Iago”と呼ばれ、正直者と信じられていたために、逆に人を巧みに欺くことが可能になりました。彼はユダのような裏切り者であり、オセローはキリストのような存在に見えますと神父様が説明くださいました。

第二幕、メタ・ドラマの観点から見ると、劇の背後には中世劇の影響即ち道徳劇・聖史劇の影響を読み取ることができます。道徳劇ならば、オセローは“Everyman”（万人）、“Everyman”の守護天使はデズデモーナ、イアーゴーは悪魔です。正に道徳劇の典型ですが、さらに聖史劇の要素も備えているとのご説明でした。オセローはキリスト、イアーゴーはユダ、デズデモーナは守護天使もしくは聖母マリアとなるからです。中世の騎士を想起させるカシオがデズデモーナに呼び掛ける台詞“Hail to thee, lady, and the grace of heaven...”の箇所は、聖書のルカによる福音 1.28 の大天使ガブリエルのお告げの場面が響きます。さらに、デズデモーナの形容には聖母マリアに取り次ぎを願う祈りの「メモラーレ」や聖母賛歌「サルヴェ・レジーナ」が響いているとのご指摘でした。

第三幕で、イアーゴーのオセロー誘惑が始まります。カシオは、聖母に取りなしを願うように、デズデモーナにオセローへのとりなしを願います。イアーゴーは、二人の様子をオセローに見せて、オセローを誤解させ、嫉妬心をあおるのです。第三幕第三場の一場面、イアーゴーはオセローの気持ちを一転させるほど見事な説得を成し遂げます。劇が進むにつれて、オセローはキリストからユダに、イアーゴーはユダから悪魔に、デズデモーナは聖母マリアからキリストのイメージに変化してゆきます。

第五幕第三場で、オセローは、デズデモーナが夫を裏切ったばかりか他の男性をも裏切る可能性があると思いこみ、妻の殺害を決意します。オセローは、デズデモーナに対しユダとなり、キリストを裏切ったユダのように、妻の殺害後、後悔のあまり自死します。神

父様は、地獄に落ちたユダと異なり、オセローを許したデズデモーナの愛でオセローは救われると解釈なさいました。

他のジェイムズ朝の悲劇と同じく、『オセロー』からヘンリー八世を読み取ることが可能だと指摘されました。中世イングランドのカトリック信仰はデズデモーナに見いだすことができますと説明くださいました。

第二部：対談

質問1：デズデモーナとエミリアの関係について、どのようにお考えでしょうか？

お答え：神父様は、エミリアは大きな役ではありませんとの一言。普通、奥様は御主人の欠点を良く知っているものですが、エミリアは夫であるイアーゴの欠点を知りません。『オセロー』はハンカチの悲劇と言われることもありますが、神父様は、講義の中では触れなかったけれどもとおっしゃって、ハンカチの問題に触れられました。デズデモーナがオセローから贈られたハンカチを落とし、エミリアが拾います。このハンカチがイアーゴの手に渡ったことが、デズデモーナとカシオの「恋愛関係」を証明する証拠として悪用され、悲劇につながるのです。他の人と同じように、エミリアはイアーゴを正直だと信じていましたが、イアーゴがハンカチを悪用したことを知っている人物でもあります。真相を知るエミリアは、イアーゴが悪者であると真実を暴露し、殺されてしまいます。エミリアは一般の人の声を代表する人物として描かれているのです。

質問2：エリザベス朝で『オセロー』は黒人の主役を扱った唯一の劇でしょうか？また、もし主人公が黒人でなければ、劇として成り立たないのでしょうか？

お答え：神父様は、オセローが黒人であることは劇の中で強調されていることに同意なさいました。イアーゴは、オセローをムーア人と呼んでいます。ムーア人は黒人ではないと思いますが、『ヴェニス商人』では黒人のモロッコ王が登場します。今は、黒人が主役の他の劇は思いつきませんとおっしゃいました。

さらに、オセローの“all his tribe”という言葉から、イアーゴはユダヤ人ではないかと思うとのコメントをつけ加えられました。

質問3：『ハムレット』のオフィーリアの溺死は自死が疑われます。マクベス夫人の死は病気による自死の可能性があり、『リア王』のゴネリルの自死は報告によるものですが、『オセロー』では、主人公オセローが自死する衝撃的な場面を舞台上で演じています。当時、自死に関しては教会も厳しかった時代だと思いますが、このような場面を上演したことに関して、神父様はどのようにお考えでしょうか？

お答え：教会法では自死を戒めていたので、当時の教会は自死者に大変厳しかったのです。教会の敷地内に埋葬は許されず、胸に杭を打たれ十字路に埋葬されました。『ハムレット』の第五幕で墓掘りが、自死を疑われるオフィーリアを墓地に埋めることに違和感を示していることが当時の事情を示しています。

最後に オセローの独白、“It is the cause,...”と “One that loved not wisely but too well,...”を神父様に倣って朗読し、第六回は閉会いたしました。